

ミシェル・フーコー『知の考古学』における諸実践の諸関係についての分析 ——実践としての言説・実践としての制度、その関係性とはなにか——

日本大学・大正大学・駒澤大学など非常勤講師 渡辺 彰規
ak-watanabe@mtd.biglobe.ne.jp

目的

ミシェル・フーコーは、『知の考古学』（1969）『知への意志』（1976）などの著作において、savoirとしての知（→connaissanceとしての知識とは区別される）の概念を深く展開してきたが、先行研究においては、知概念よりは、権力や言説といった概念についての研究の中に埋もれてきたきらいがある。だが、後述の理由から、論者は、ミシェル・フーコーの学説の本質的な理解において、savoirとしての知という概念を捉えることは不可欠だと考えている。

というのは、savoirとしての知の概念は、マルクスによるイデオロギー分析から知識社会学や言説分析に至るまで前提とされてきた「存在」と「知識」、「コンテキスト」と「テキスト」という二項対立に亀裂を入れ、それを不可能にする領域と内実を伴った概念であるためである。また、ミシェル・フーコー学説研究においても、H. Dreyfus and P. Rabinow（1983）以来、『知の考古学』は失敗作であるという評価が定着しているが、論者は、フーコーの初期著作は無論のこと、フーコーのその後の系譜学的研究とされているものもまた、『知の考古学』における savoir としての知というアイデアによって根底的な水準で読み解けると考える。

本報告では、その savoir としての知の具体的内実である、①実践概念、具体的には実践としての言説、実践としての制度、そしてまた、フーコーが力説してきたもののその意味が取り辛く Dreyfus からも誤読してきたところの、②これらの実践間の諸関係がいかなるものであるのか——この2点について『知の考古学』を基に詳細に読み解いたうえで批判的分析を加えるものである。

このことは、社会学における先述の伝統的二項対立からの抜け道を提唱するものであると同時に、本来フーコー学説理解の核心となるべき savoir としての知についての理解に資する意義を有する。

分析方針

諸実践が諸関係を結ぶ——それこそ savoir としての知の内実到他ならぬ。本報告はこの点についての具体的かつ詳細な理解を提供することを第一に試みたい。その第一の接近において考えられるべき点は以下の点である。

- ・はじめの対象の現出から自律的な領域としての知を形成するまでの過程はいかなるものと記述されているか
- ・その過程の結果として、いかなる仕組みにおいて・どの程度において、savoir としての知は相対的な自律性を有すると記述されているか
- ・知の考古学の前後の著作における歴史記述の方法との関連はいかなるものか
- ・根底的なジレンマとして、分散的な関係の記述は、単なる出来事の寄せ集めでもなく、内的統一性を保ったシステムでもなく、いかなる権利においてある種の総合として描き出すことができるのか、そしてその試みは成功したのか否か

文献

Dreyfus, H. & P. Rabinow, 1983, *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, 2nd ed., Chicago: Chicago UP. (=1996, 山形頼洋・鷺田清一他訳『ミシェル・フーコー——構造主義と解釈学を超えて』筑摩書房.)